

第3部 子どもの読書活動の推進に向けて（計画の5つの柱実現の取り組み）

A 子どもの成長に応じた家庭での読書習慣の定着を目指します

1 家庭の役割と現状

（1）家庭での子どもの読書の現状

子どもは保護者との温かいふれあいの中で言葉を学び、さまざまな体験をすることなどによって、基本的な生活習慣を確立し、成長していきます。家庭は子どもたちにとって生活の基本の場であり、読書活動の基礎を築くうえで最も重要な役割を果たす場所です。

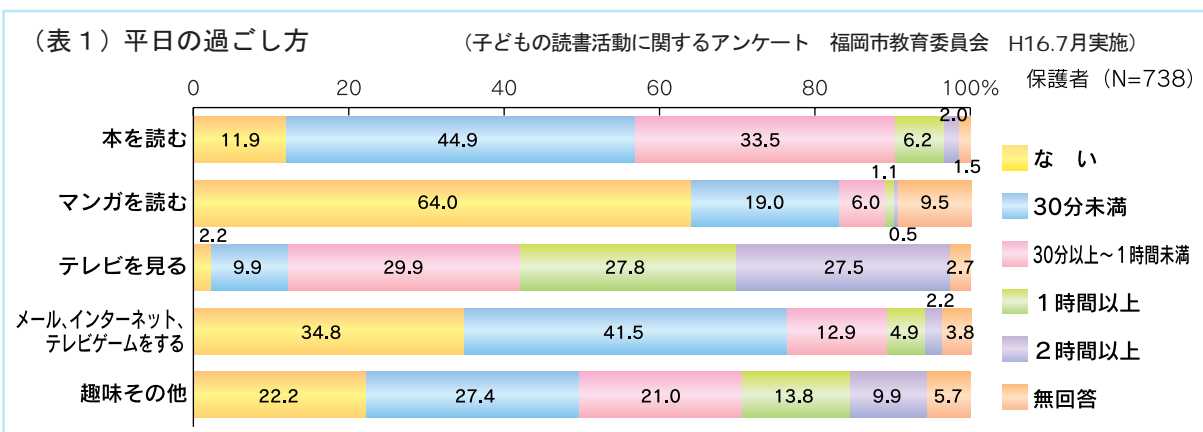
しかし近年、テレビやゲーム・パソコンなどの情報機器の普及、塾や習い事の増加などで、子どもを取り巻く生活環境が大きく変わり、読書に親しむ機会が減少し、家庭での子どもの過ごし方が時代とともに変わってきています。

（2）保護者の読書の現状

このような子どもの状況に対して、保護者の状況はどのようなのでしょうか。

福岡市が18歳以下の子どもを持つ保護者を対象に実施した調査で、「あなたは読書が好きですか」という質問に「好きだ」「どちらかといえば好きだ」と**84.5%**の人（全区分平均。以下同じ）が回答しています。また、「あなたは読書が大切だと思いますか」という質問には「大切だと思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた人が**97.7%**にも上り、子ども以上に読書の大切さを認識し、読書を好きな人が多いといえます（資料編53、55ページ「子どもの読書活動に関するアンケート」参照）。

一方、「1カ月に何冊本を読みますか」という質問には「読まない」「1冊未満」と答えた人が**41.2%**に上ります（資料編54ページ「子どもの読者活動に関するアンケート」参照）。また、保護者の平日の過ごし方を見ると、1時間以上本を読んでいる人は**8.2%**なのに対し、1時間以上テレビを見ている人は**55.3%**となっており、余暇として家庭で一番多くの時間を費やしているのは、子どもと同様テレビを見ることになっています（次表1参照）。



これらの結果からみると、子どもと保護者ともに読書は好きで、大切だと認識していますが、実際の読書行動には結びつかず、読書時間もテレビと比べると格段に短くなっているのが現状のようです。この読書に対する認識や読書習慣は子どもと保護者で同じ傾向を示しており、現在の家庭においては子どもと保護者ともに読書離れが進みつつあると思われます。

（3）乳幼児期の本の読み聞かせ

乳幼児期の保護者の関わりや遊びなどの体験は、子どもの成長に役立つだけでなく、人格形成や生きていく上で必要な知識・知恵の習得に大きな影響を与えます。乳幼児期の子どもが家庭で保護者とともに絵本を開き楽しい時間を持ったり、身近な図書館でともに本に親しんだり、地域の文庫活動に連れて行ってもらうことは、本を通じたさまざまな体験により子どもの発達を促すことにつながります。また、保護者にとっては絵本を通して子育ての楽しさを実感し、子育て不安を解消する一助となるものです。さらに、このような乳幼児期の取り組みは、自ら本に親しむ子どもを育てる礎となります。

本市が実施した「子どもの読書活動に関するアンケート」で、主に乳幼児期に実施されている「読み聞かせ」について尋ねたところ、「本を読んでもらうのが好きです（でした）か」の質問に対して「好き」「どちらかといえば好き」と答えた小学2年生は**68.5%**、小学5年生**64.4%**、中学2年生**46.9%**、高等学校2年生**63.0%**と高い割合を示し、子どもたちが読み聞かせについて好意的に捉えていることが分かります（資料編48ページ「子どもの読書活動に関するアンケート」参照）。

また、子を持つ保護者に対する「読み聞かせをされていた（います）か」の質問に対しては「よくしていた（いる）」「ときどきしていた（いる）」の答えが、**80.8%**（全区分平均。以下同じ）に上り、読み聞かせに積極的に取り組んでいる保護者の姿が浮かび上がります。「読み聞かせはどのような影響があったと思われますか」との質問に対しては、「本が好きになったと思う」が**42.6%**、「感受性が豊かになったと思う」が**49.4%**、「国語力がついたと思う」が**33.1%**となっています（資料編60、61ページ「子どもの読書活動に関するアンケート」参照）。

これらの結果から、読み聞かせは乳幼児にとって楽しい時間であり、また本を好きになるきっかけともなっていることを示しています。また、保護者も読み聞かせの大切さを認識し、読み聞かせを積極的に行っており、子どもに与える影響は本そのものが好きになることだけにとどまらず、感受性や国語力などの力もつくると認識されていることがわかります。

本市においては、すべての乳幼児と保護者に、「絵本を開くひとときの楽しさ」を伝える「福岡市ブックスタート事業」を平成16年8月より開始しました。この事業は赤ちゃんとの最初の出会いをつくりながら、乳幼児期における読み聞かせの大切さを広く保護者に理

解してもらうため、各区保健福祉センターにおいて行われる4か月児健診の際に、絵本の読み聞かせとお薦め絵本の配付や紹介をするものです。絵本ふれあいタイムとして、地域の読み聞かせボランティアと連携・協力し、読み聞かせボランティアが読み聞かせの実演を行っています。

また、地域における文庫活動や公立図書館を紹介して、赤ちゃんと保護者のふれあいの大切さを伝えながら、子どもと保護者の読書活動の継続・促進を支援しています。

（4）児童生徒期の子どもの読書

本市の実施したアンケートの結果からは、子どもと保護者ではよく似た読書認識や習慣があることが表れており、家庭で子どもと保護者が一緒に読書をしたり、本と関わる時間を共有することは、子どもの読書習慣の定着にきわめて重要だといえます。

小学生になり、自ら本を読む年齢に成長した子どもの読書活動は、想像力や思考力を養い、人間性の基礎を築くものであり、また、人生を豊かなものにする一助ともなるものです。保護者が子どもと本に関する語らいの時間を持ったり、子どもに発達段階に応じた本との出会いの機会を作るなど、家庭での読書習慣の定着を図っていくことが大切です。



2 家庭における読書活動推進のための取り組み

乳幼児期から児童生徒期を通じて、子どもが家庭において読書習慣を身につけ、定着させていくことができるよう、保護者に対して、子どもの読書の意義を伝えて、家庭において読書習慣を定着させる支援を行います。

読書の大切さを広く市民に伝え、継続して本に親しんでもらえるよう、毎月23日を「福岡市子どもと本の日」として定め、啓発を進めます。

また、乳幼児期の早い時期から子どもが本と出会えるよう、4か月児とその保護者を対象に実施するブックスタート事業や、家庭教育手帳（※）（※は40～41ページの用語解説に記述。以下同じ）の配付、保育所、幼稚園、学校などでの保護者への啓発などにより、直接に子どもと保護者を対象とした読書の大切さを伝える事業を、子どもが成長していく過程に応じ、さまざまな時期や機会を捉えて進めていきます。

あわせて、図書館の児童図書などの充実を図るなど、家庭で読書に親しめる環境づくりにも力を入れていきます。

①【新規】「福岡市子どもと本の日」の創設（毎月23日）

「子どもの読書活動の推進に関する法律」により、4月23日は「子ども読書の日」と定められています。これは、国民の間に広く子どもの読書活動についての関心と理解を深めるとともに、子どもが積極的に読書活動を行う意欲を高めるために設けられたものです。

福岡市ではこの日にちなみつつ、子どもが本と親しむ機会をさらに増やし、家庭・地域・学校などを通じて、子どもの自主的な読書活動がより一層進められるように、毎月23日を「福岡市子どもと本の日」とします。この日は、子どものいる家庭において、なるべくテレビなどを消して、子どもと保護者ともに読書に親しめるよう、市民へのPRや働きかけを行います。

また、家庭での読書活動を推進するため、書店にも協力を依頼するなど、連携を進めていきます。

②ブックスタート事業

福岡市に生まれるすべての赤ちゃんと保護者を対象に、各区の保健福祉センターで行われる4か月児健診の際にお薦めの絵本を配付するとともに、「赤ちゃん絵本を開くひとときの楽しさや大切さ」を伝えます（平成16年8月開始）。

③家庭教育手帳の配付による啓発

家庭教育手帳の乳幼児編を4か月児健診時に、「小学生（低学年～中学年）編」を小学1年生の保護者、「小学生（高学年）～中学生編」を小学5年生の保護者にそれぞれ配付し、読書の大切さや保護者の関わりの重要性などを直接保護者に伝えます。

④PTAの取り組みへの支援

PTAと連携して開催する講演会や研修会などにおいて、子どもの読書活動推進の取り組みに関する情報交換や研究協議を行い、子どもたちが身近に本に親しむことができるような環境づくりを支援します。

⑤図書館での児童図書の収集、提供

子どもが読書の楽しみを発見し、読書習慣の形成の助けとなるよう、子どもの成長に役立つ各分野の児童図書などを収集・提供します。また、本の紹介、読書に関する相談や情報の提供を行います。

⑥保育所、幼稚園、学校などでの保護者への読書の重要性についての啓発

保育所や幼稚園、学校などにおいて、発達段階に応じた読書の重要性を保護者会・PTAなどを通じて伝えていきます。